日本バプテスト連盟結成50周年記念声明

私たちは１９９７年に日本バプテスト連盟結成５０周年を迎えるにあたり、ここに声明を発表し、連盟結成の目的である「協力伝道ー全日本にキリストの光を」を再確認し、来る５０年に向かい新しいヴィジョンをもって協力伝道に取り組む出発点としたい。

旧約聖書の伝統によれば５０年目は「ヨベルの年」（註）である（レビ２５：８～５５）。これは安息日から派生した７年ごとの安息年の規定が更に７倍され拡大されたものである。イスラエルは５０年ごとに、売却された土地を無償で元の所有者に返還し、債務による奴隷を解放することによって「すべてが主のものである」ことを告白したのである。創世記１～２章によれば神の天地創造の目的は人間を含めた全被造物を７日目の神の安息の祝福に招くことである。神の安息にあずかることによって人間の労働、所有、支配が無制限に広がる危険から守られ、限界づけられるのである。安息日同様ヨベルの年においても、祝福への招きはイスラエルに独占されるものではなく、共に住む雇人、寄留者、旅人、そして土地や家畜などにも向けられている。このように、ヨベルの年は、神ご自身による「あがないの年」、「喜びの年」であり、私たちに、過去に向かって神の解放（自由）の内実を問わせ、将来に向かって全被造物との交わりの全き回復を待望させ、その課題を引き受ける決意を促す年なのである。

イエス・キリストはヨベルの年を成就するために私たちのただ中に来られた。「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別して下さったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」（ルカ４：１８～１９）。しかし今日、私たちは神の安息がいまだ完成してはいない現実に直面し（ヨハネ５：１７）、人間を含めた被造物全体が破れ、うめいているのを見聞きする（ローマ８：１８～２５）。このような現実の中で、私たちは主日礼拝に集い、キリストの到来を宣言し、「主の晩餐」においてキリストによる解放の出来事を想起し、神の安息の完成を先取りして祝う。そして、私たちは「今、ここで」この喜びを「誰と共に」祝うかを問われているのである。

敗戦２年後の１９４７年４月３日、旧日本バプテスト西部組合系の１６教会が福岡の西南学院教会に集まり、日本基督教団を離脱し、日本バプテスト連盟が結成された。当初より連盟結成の目的は協力して伝道し、「全日本にキリストの光を」（５３年第７回年次総会決定）もたらすことであった。米国南部バプテストの物心両面の厚い支援の下、全国に

福音宣教の拠点が布石されたことは感謝にたえない。１６教会は今や２４４教会・８８伝道所へと成長し、また、幾つかの事業体を生み出してきた。私たちは宣教（ミッション）への先達のこの情熱を受け継ぎたい。

しかし、ヨベルの年の祝いは過去５０年の歴史における私たちの歩みに関して悔い改めを迫る。教会は戦争責任を明確にせず、物質的・経済的復興と繁栄をひたすら目指してきた日本社会の一員として、「豊かさ」の神話から決して自由ではなかった。私たちの福音宣教は、天皇制が象徴する家父長主義的統合機能と差別、競争・効率主義による人間性の歪み、被造世界の収奪と破壊、将来の世代に豊かさのツケを回す世代エゴをどれだけ撃ってきたであろうか。また、教会は、沖縄に「基地の島」としての犠牲を強いてきた歴史やいわゆる「強制軍隊『慰安婦』国家賠償問題」に見られるアジア諸国への戦争責任の回避を自己批判を含め、どれだけ批判してきたであろうか。

ヨベルの年の祝いはまた私たちの目を新しい５０年へと向かわせる。私たちは「自立と協力」というバプテストの課題を継承し、自立が孤立や他教会排除あるいは無関心に陥らず、協力が依存性に陥ることのないような「協力伝道」を目指していく。私たちは、この課題を、すべては神のものであり、私たちはすべてをただ預かっているにすぎないという寄留者、旅びとの信仰を「生の全領域」に展開する中で果たしていく。私たちは、他者に開かれ、違いを喜び、被造世界と共生し、アジアをはじめとする他国の民と解放の福音を共有するような宣教を目指していく。そのとき、高齢化社会にあって、労働と消費の絶対化を越え、「いのち」を貴び、「生活」を分かち合う私たちの子たち、孫たち、曾孫たちは次のヨベルの年を感謝をもって迎えるであろう。

（註）「ヨベルの年」の規定がイスラエルにおいてどの程度実施されたかに問題も残るし、５０年という年数そのものにこだわる必要もないが、その神学的意味は深い。

１９９７年9月２３日

日本バプテスト連盟結成５０周年記念大会